

徐霞客遊記訳注稿 資料篇(一)

— 陳函輝「霞客先生墓志銘」 —

薄井俊 二一 埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード：陳函輝、徐霞客、徐弘祖、墓志銘

はじめに

本稿は、徐霞客に関する基礎的研究のひとつとして、陳函輝の手になる「霞客徐先生墓志銘」の訳注を行うものである。

陳函輝(一五八九〜一六四五)は、原名は煒、字は木叔、号は寒椒道人、また小寒山子。浙江臨海の人。崇禎七年(甲戌、一六三四)の進士。江蘇の常州府靖江県の県令を授けられるも、御史に弾劾されて罷免。同十七年(甲申、一六四四)、李自成、次いで清が北京を陥とすと、魯王に従って明王朝復興運動に加わる。しかし、海上で王とはぐれ、入水自殺した。「明史」巻二七六に簡単な伝がある。著述は「小寒山子集」⁽¹⁾として、「四庫禁燬書叢刊」に収録されているが、本墓誌銘は見えない。墓誌銘本文中にも見えるが、黃道周・陳繼儒・錢謙益らとともに、江南の文人社会を形成しており、徐霞客とも極めて親しかった。

徐霞客の逝去は、崇禎十四年(辛巳、一六四二)正月。その直後に、

霞客の族兄の徐仲昭から墓誌銘の執筆を依頼されている。霞客の埋葬は、翌十五年(壬午、一六四二)の三月九日で、この墓誌銘はその折りに捧げられたものとなる。北京の陥落は、そのわずか二年後で、陳函輝の死はさらにその翌年のことであった。

本墓誌銘は、乾隆四十一年(二七七六)刊の、最初の「徐霞客遊記」刊本に、外篇の一つとして収録されている⁽²⁾。また、民国刊「梧棲徐氏宗譜」にも収録されるとされる⁽³⁾。

凡例

- ・内容上、適当なところで章分けをし、小題を設けた。
- ・底本は、褚紹唐・呉王寿整理の上海古籍出版社『徐霞客遊記』を用いたが、施されている固有名詞記号には従わなかったところがある。自注は「 」で示す。
- ・他に、呂錫生主編「徐霞客家伝」所収のテキストがあり、それには呂錫生が注を施している。
- ・また錢謙益の「徐霞客伝」は、陳函輝の墓誌銘を下敷きにして書かれたと推測され、用語や記事に重複が多い。よって、錢謙益「徐

霞客伝」に対する注釈も参照した⁽⁴⁾。

・紙幅の関係で、口語訳と簡単な注のみとする。詳注は別途ウェブ上で公開の予定である。

注

(1) この集自体が、きちんと編集された一つの書籍ではなく、陳函輝の著述を綴り合わせたものようである。

(2) それ以前の抄本に収録されていたかどうかは、今のところ調べられていないが、上海本の校勘記は、徐建極本（個人蔵）と陳泓本（上海図書館蔵）とにあることを示唆する。

(3) 「梧棲徐氏宗譜」は、明代の第九祖徐麒に始まり、繰り返し重修されてきた。よって、陳の墓誌銘がいつ頃から収録されてきたのかは、明らかではない。

呂錫生「徐霞客家伝」に翻刻本がある。

(4) 錢謙益「徐霞客伝」は、「虞初新志」に収録されており、その和刻本を訓読の参考とした。

訳注

霞客徐先生墓志銘

陳函輝

一 序―陳函輝が墓誌銘を記すことになった経緯

墓志とは、墓に入った人の事を記すものである。霞客先生は、私と堅い友情で結ばれていた人で、その人柄は「雅やか」「善良」「自由気まま」であった。一生のうちに経めぐったところは、星に届く山岳に手をかけてよじ登ったり、遙か辺境の地を踏み歩く、といったものであった。そして今は、道山（仙人の棲む山）に遊んでいるのだろう。天帝の住まいに遊んでいるのだろう。はたまた雲気への

つて飄々と八方極遠の地に遊んでいるのだろう。いわゆる、鳳凰が高く千仞の上に飛翔しながらも、なお決断できずに「人間社会に留まろうか」と言っているようなものか。

そうではあるが、墓に墓誌銘を記すのは古くからの礼であり、なされるべきことである。先に先生が、汗を流しながら漫遊されていた時は、同志である我々は、夸父が太陽の後を追っていつて、遂に旅先で死んでしまったのと同じく、先生が帰郷して故郷に埋葬されることがないのではないかと恐れていた。それが今、先生は身を守って天寿を全うし、その肉体を先祖の墓に寄せようとされている。そこで先生の修道者としての気質や凡俗を超越した才能について、きちんと正しく後世に教えることになれば、先生の生涯の親への孝行と大いなる節度、剛直厳正な古人を思わせる心、及び傑出した優れた文章とが、ともに乗り物に乗せられたように世界に伝わっていく、将来の人々に対してもそのすばらしさを輝かすことがきつとできるであろう。

思うに、先生の平生の交友である、陳繼儒・陳仁錫・繆昌期らの諸君子たちは、みな先生に先んじて天上に昇られてしまった。黄道周先生は、このところ監獄に繋がれてしまっている。その中で、先生の兄の徐仲昭が墓志と墓銘とを下して、私に文章を書くように命じられた。これは、世間のことを知らない小物の鳩が、偉大な鳳凰を賦にして歌うような、恐れ多いことである。しかし、私と先生との交わりはとても久しいものがあるので、道義として辞退するわけにはいかないだろう。

注

「鳳凰」が-highの句：前半は賈誼「弔屈原文・賦」（『文選』卷六十）に「鳳皇翔

於千仞兮、覽德輝而下」とあるのに基づく。後半の典故不明。夸父：「列子」湯問篇。陳繼儒：一五八〇～一六三九年。松江（上海）の人。字仲醇、号眉山。陳仁錫：一五七九～一六三〇年。長洲（江蘇省呉県）の人。字明卿、号芝台、諡文莊。繆昌期：一五六二～一六二六年。江陰の人。字当時・又元。号西溪。黄道周：一五八五～一六四六年。漳浦（福建省）の人。字幼元、幼平。号石齋。諡忠烈。学問の他科学や書画にも優れていた。以上四子は霞客と親しかった。仲昭：徐霞客の族兄。しばしば旅遊をともにした。鳩：「莊子」逍遙遊篇に「鴟與學鳩笑之曰」とある。偉大な鳳凰：原文「希有鳥」。「神異經」に見える崑崙山に棲む大鳥。李白「大鵬賦序」に「余昔于江陵見天台司馬子微。謂余有仙風道骨、可與神遊八極之表、因著『大鵬遇希有鳥賦』以自廣」とある。

二 霞客の家系

謹んで先生の行状を述べる。

先生は諱を弘祖、字を振之といい、霞客は号である。他に黄道周がつけた霞逸という号もあるが、もっぱら陳繼儒がつけた霞客の名が流布している。

その先祖は、おそらく「南州高士」と称された、後漢の隱者の徐穉の血を引くものであろう。北宋時代に開封府の知事を勤めた徐錮という人がいて、宋室の南渡とともに江南に移り住んだ。これが第一世。その子孫たちは、常州・松江・蘇州といった地方に分散して居を定めた。

徐錮から五代目の徐千十一に至って、初めて住まいを江陰の梧棲里に移した。そして子孫ともども、元王朝には仕官しないことを誓った。

明朝に入ると、徐麟が、すぐれた人材であることから、お上に徴されて四川の賊を降伏させる使者に立った。徐麟の子の徐恣は、飢饉に際して粟を抛出して民を助けた。ともに国家からの命令という

榮譽を受け、天子のお褒めに預かったのである。

徐恣の子が徐頤である。徐頤は、古代文字に習熟しており、中書舍人に任ぜられた。弟の徐泰とともに、才能名声によって役人としての名声を輝かせた。

徐頤の子が、徐元猷である。徐元猷の子が徐経である。この父子は科挙の試験において、優秀な成績をおさめた。

徐経の子が、徐洽である。官は鴻臚簿に至った。

徐洽の子が、徐衍芳である。官は光祿丞に至った。これらの伝記については、すべて家譜として現在に至るまで伝わっているものである。

そして徐衍芳の子が、徐有勉である。とりもなおさず霞客の父君である。

注

徐錮：呂家伝所収の「梧棲徐氏宗譜」（以後「民譜」）によれば、字子固。徐家第一世。北宋時代に開封府の尹をつとめ、高宗建炎四年（一一三〇）に皇室と共に南渡。民譜に繆昌期の「子固公像贊」収録。以下の徐家の注は、多くを呂家伝による。常州・松江・蘇州：原本は「荆溪・雲間・琴川」。それぞれその地を代表する場所で表記している。徐千十一：民譜によれば、字名世。徐家第五世。宋の承事郎となる。宋が亡ぶと、梧棲里に隱棲した。民譜に、宋濂の「千一公贊」収録。上海本では、「千」を衍字としているが、民譜によれば、「千十一」で間違いない。徐麟：字本中。元至正二十一年（一三六一）～明正統十年（一四五五）。徐家第九世。洪武二十六年（一三九三）、蜀に使者として派遣されている。徐恣：麒麟の長男。字景南、号退庵。徐家第十世。明洪武二十六年（一三九三）～成化十六年（一四七五）。正統年間（一四三六～一四四九）と景泰年間（一四五〇～一四五六）に、粟を抛出して飢民を救い、「義民」の称を授けられた。徐頤：恣の長男。字惟正、号一庵。永樂二十年（一四二二）～成化十九年（一四八三）。徐家第十一世。中書舍人。民譜に文徵明「一庵公伝」、祝允明「一庵公贊」収録。徐泰：恣の次男。字惟進、号生白。宣德四年（一四二九）～成化十五年

(一四七九)。景泰七年(一四五六)科挙の郷試を第一位で及第。荊門郡太守。徐元猷：頤の長男。字尚賢、号梓庭。景泰六年(一四五五)成化十九年(一四八三)徐家第十二世。成化十六年(一四八〇)郷試を五位以内で及第。徐経：元猷の子。字衡父、直夫、号西塢。成化九年(一四七三)正徳二年(一五〇七)徐家第十三世。弘治八年(一四九五)舉人。徐洽：経の次男。字恒修。悦中、号雲岐。弘治十年(一五〇七)嘉靖四十三年(一五六四)徐家第十四世。科挙には及第せず、鴻臚寺の属官。分家して、梧棲から老鳴岐(馬鎮郷老鳴岐)に移り住む。徐衍芳：洽の長男。字汝声、号柴石。生卒年不詳。徐家第十五世。光録寺署丞。馬鎮の南陽岐に移り住む。徐有勉：衍芳の三男。字思安、号豫庵。嘉靖乙巳二十四年(一五四五)万曆甲辰三十二年(一六〇四)民譜に周延儒「題豫庵徐翁像」収録。

三 霞客誕生と幼少期・青年期

有勉の夫人である王氏は、霞客をはらんで十ヶ月で、不思議な夢とともに霞客を生んだ。生まれたとき体は大きく眉はめでたく、かしらは峯のように隆起し、緑の腫がきらきらと輝いており、一日中眠るがなかった。彼を見た人は、仙道を学ぶ人だと見なした。

子どものころ、家を出て塾で学んだが、口を開いて言葉を述べればそれがそのまま詩編となり、筆を取って文字を書けばそれがそのまま文章となるのであった。それでいて親の傍らにいたときは甘え慕った。これは彼の天性のものである。

そのうえ特に「奇書」を好み、古今の歴史書・地理書・山海経図のたぐいをほしのままに博覧し、あらゆる仙人や隠士の足跡に思いを馳せた。それらの書籍を、常にこつそりと経書の下に隠し、深く読み味わい、ここに喜んでいた。ただ両親の期待に違うのをおそれて学問を続けたのであって、文房具に向かい、科挙の試験に応募することは、彼の本心ではなかった。

かつて「陶水監伝」を読むと、すぐに笑いながらこう言った、「ここでは松風くらいが聞く価値がある程度だ。青空を見上げ、太陽に手を掛けて登るようなことだつて、どうして遠いといえようか」と。敵忌の「州は九つあり、その八つを渡り歩いた。岳は五つあり、その四つに登った」という言葉を見ると、またもや掌を撫でながら、こう言った、「大丈夫たるもの、朝に大海原にいたら、暮れには蒼梧にいるべきである。どうして世界の一部に自分を限定する必要があるか」と。その話の誇大さを怪しむ人がいても、泰然として顧みなかった。むしろ益々古人の逸事を涉獵し、神仙達の蔵書に到るまで読まないものはなかった。

酒や詩歌を好む人に遇うと、親戚や古なじみとともに往来交際し、酒と詩作を楽しんで、ともすれば夜明けに達した。

そうしたまた、朝に夕にとやさしくおだやかで、小さな事でも必ず謹み、口を出ることばはすべて忠孝に符合するものだった。父親を敬い母親を慕い、贅沢のたぐいなどは心を正しく保って絶対に行わなかった。それは後漢の隱者梁鴻が、子どもの頃決して他人の世話にならなかったことを、彷彿させるものであった。

注

「生まれたとき」の句：原文「生而修幹瑞眉、雙鬚峯起」。一応このように訳したが、ご教授を請う。陶水監：水監は水利を司る官。呂家伝の注は「陶淵明」のこととする。この引用文も不詳。敵忌：前漢初の文学者。「水経注」卷三十三引李固「与弟固書」に「昔嚴夫子常言、『經有五、涉其四。州有九、遊其八。』欲類此子矣」とある。陳函輝の引用文はやや異なる。「父親を敬い」の句：原文「維桑與梓、必恭敬止」。詩経小弁の句で、両親を敬い慕うこと。「贅沢」の句：原文「裘馬」。論語「雍也篇」に「赤之適齊也、乘肥馬、衣輕裘」とあるに基づく。贅沢をすること。「梁鴻」の句：原文「童子鴻不因人熱」。御覽「四二五引「東漢觀紀」にある挿話で、童子であった梁鴻が、幼くとも他人

の世話にはならなかった話。

四 父有勉の遭難、母の後押しで旅遊に出ること

童子の年を越えるころ、父の有勉が別荘で盗賊に襲われ、重傷を負った。霞客は裸足で駆けつけ、看病すること年を越えた。しかし有勉はなくなり、霞客は悲しみのあまりやせ衰えてしまった。村人は幼いながらも孝であると称賛した。力を葬儀に尽くしているうちに、外寇がたびたびあり、そこから世間の変化無常を感じ、いよいよ世俗から遠ざかるようになった。

霞客は、名山大川の奇勝を訪ねたいと思っていたが、母親が存命で、お世話をして孝行を尽くさなければならぬと考えて、出遊を願ひ出ることはなかった。しかし、母親の王夫人は、彼を励ましてこう言った。「天下四方を志すのは、男子として立派なことです。ほかでもない『論語』に『親が存命中の』出遊は必ず一定の場所にせよ』とあります（親が存命中の出遊そのものを禁じているのではありません）。距離を調べ、かかる時間を計り、往復があらかじめ予定していたものとあまり変わらない、ということさえできるのであれば、どうして我が子に、籠の雉や門につながれた馬のような、拘束される苦しみを味あわせることができるでしょうか」と。そして霞客のために「遠遊冠」を作り、彼の出遊の心を励ました。かくして霞客は、ロバに乗り、わらじを履いて、幽山を探索し険岳を渡り歩き、我が身を天下中にさらし、これ以後轍を止めることはなかった。

注

童子の年…このとき霞客十八歳。「世間の变化」の句…原文「視之如白衣蒼狗」。杜甫「可嘆」詩に基づく。論語…里仁篇の「父母在、不遠遊、遊必有方。」

五 崇禎五年の旅遊の回顧

崇禎五年（一六三二）秋のことである。天台雁宕への三度目の旅遊を契機とし、霞客は仲昭兄とともに、私を小寒山に訪ねてくれた。灯火をともして夜話をし、その半生の旅遊の軌跡を語った。

自ら次のように語った。

「万曆三十五年（一六〇七）、初めて舟を太湖に浮かべ、東西の洞庭山に登り、あたりを眺めた。また呉王闔閭が遇ったという、靈威丈人の遺跡を訪ねた。

その後、山東河北の地を歴遊し、泰山に登り、孔子廟に拝謁し、孟母三遷の古里を訪ね、嶧山で枯桐を弔った。これは同三十七年（一六〇九）である。

南に行つて普陀山観音靈場に渡り、彼の地を遍歴し、天台山華頂峯の八千丈の頂に登り、雁宕山で東の方の大・小龍湫の滝を眺め、さらに石門と縉雲山に及んだ。これは同四十一年（一六一三）のことである。

同四十二（一六一四）から四十三年（一六一五）にかけて、私はこう考えた、『我が家は江蘇にある、どうして近隣の四郡を訪ねないでよいだろうか。南京は六朝時代には都がおかれて栄えていたし、本朝では洪武帝が首都としていたところである。二十四橋に懸かる明月、三十六曲の河川など、どうして手を拱いて見過ごしてよいであろうか』と。（かくして南京などの近郊をめぐった。）

同四十四年（一六一六）の旅遊は、また遠出となった。春の初めには、黄山・白岳山への遊行をなし、夏には武夷山の九曲溪に入った。秋には五泄山・蘭亭にもどり、禹陵の窆石を見た。その後、西湖に一ヶ月ばかり舟を浮かべた。

丁同四十五年（二六一七）は、旅遊をせず、自宅に居た。

また江蘇宜興の善卷洞や張公洞に入り、湖南省の九華山に登り、江西省の廬山の五老峯を望んだのは、同四十六年（二六一八）である。魚龍洞に至り、錢塘江の潮流を観察しながら溯り、江郎山・九鯉湖に至って帰ったのは、同四十八年（二六二〇）であった。

天啓元年（一六二一）から同二年（一六二二）の二年間は、嵩山・華山・武当山を遊歴し、東海を遙かに眺め、下って瀟水湘水を遡った。中国全土を俯瞰し、九つの烟がたちのぼることが、掌の中に見えるかのようにであった。

この間に出会った人々では、廬山の慧燈禪師・終南山の道士・太華山の道士などは、俗塵を全く感じさせない風貌であり、今でも目の中に微かに見えている」と。

注

太湖の遊：遊記なし。靈威丈人：古代の仙人。龍威丈人とも。嶧山：山東

兗州府鄒県（鄒城市）の東南にある名山。始皇帝の刻石があった。枯桐：後

漢書「蔡邕伝によるならば、琴の異称。「晋書」張華伝によるならば、木魚。

山東河北の遊：遊記なし。普陀山観音靈場：原文「大士落迦山」。遊記なし。

南京の遊：遊記なし。夏：「遊武夷山日記」では、二月に訪れたことにな

っており、墓志銘と時期が異なる。魚龍洞：不詳。遊記なし。天啓元年二

年：遊記では天啓三年（一六二三）一年間のこととする。これも墓誌銘とは異

なる。武当山：原文「玄」。湖広襄陽府（湖北省十堰市）にあり太和山とも。

嵩山と解する訳もあるが誤り。「中国全土」の句：原文「齊州九點煙」。李賀「夢

天」に「遙望齊州九點煙、一泓海水杯中瀉」とある。齊州は中国のこと。高所

から九州（中国）を俯瞰すると、九つの点の煙のように見えることから、中国

を俯瞰すること。この句は、あるいは、天啓の旅遊だけに関わるのではなく、

これまで述べてきた、旅遊全てをまとめて述べているのかもしれない。廬山

の慧燈禪師：「遊廬山日記」八月二十日条に見える。終南山の道士：原文「終

南山之採藥野人」。遊記がなく不詳だが、錢謙益の「徐霞客伝」には「由終南背

走峨眉、從野人採草、棲宿巖穴中、八日不火食。抵峨眉、屬奢酋阻兵、乃返」とある。太華山の道士：原文「太華之休糧道者」。上海本は「休糧」を固有名詞とするが、「穀物断ち」即ち道士の意味ではないか。「遊太華山日記」三月一日条に、道士李姓なるものに泊めてもらおうとある。

六 旅遊と母への孝養

私は彼の言葉を聞いて、天の河すら極めてしまうのではないか、と思つた。そこで問うた、「先生は旅遊に厭きないのですか」と。すると答えるには「まだまだです。国内についても私が訪ねたところは、まだ辺境を極めつくしたとは言えません。広西や雲南が私を待っています。四川峨眉山への旅遊も、奢崇明が乱を起こしたため、早々に陝西を経由して帰ってきたもので、私の本意ではなかったのです。これからはるか崑崙などの僻遠の地を訪ねなければならぬのです」と。

仲昭は私にこう言つた、「私の弟は、生まれつきとても親孝行で、遊行に行くたびに、母親の長寿健康のために、様々な靈草・香草などを採取して来る。また各地方の風土の異なること、信じられないような神奇なことや神怪のすみか、崖や谷・石段などの見聞してきたことどもを、話すのです。聞いた人々は、口をぽかんと開けたり、驚いて冷や汗を流したりしますが、母親はかえっておもしろがるのですよ」と。

徐霞客は、母親が高齢なので、遠遊は差し控えるという戒めを受けようと願ひ出た。すると王夫人は、「そのことは以前あなたと話しているでしょう。私ならまだ健康です。今は自分のことを優先させなさい」と言つた。そして王夫人自身が、江蘇の荊溪・句曲を旅遊し、

霞客にお供をさせた。行程では、王夫人の方が霞客よりも先に立つて歩いたのであった。人々は笑いながら「景勝を求める素質は血筋なのだなあ」と言った。

注

奢崇明：天啓二年（一六二二）から崇禎二年（一六二九）にかけて、四川貴州雲南に起こった苗族の反乱の頭目。前節の終南山の記録もあり、徐霞客は陝西・四川を訪ねたようであるが、それがいつのことかは明らかでない。荆溪・句曲の旅：遊記なし。

七 母八十の寿と逝去

天啓四年（一六二四）、母の王夫人は八十歳となった。そこで陳繼儒が長寿を言祝ぐ序文を書き、張荅石が「秋圃晨機図」を描いた。李維禎先生がその画に序を付けた。時に三老は皆七十歳以上であった。名公たちの題詠が、幾んど海内すべてから寄せられた。霞客はそれらを悉く石碑に刻して保存した。今伝わっている「晴山堂帖」がこれである。

この年、霞客は再び旅遊に出かけた。華山の麓の青柯坪に至って、ふと胸騒ぎがした。急いで帰宅の準備を整えて馳せ帰ったところ、母は既に病を得ていた。翌年（一六二五）の春から秋にかけて、つきつきりで看病し、帯を解く暇もなかった。母が食事をしないと、霞客も食事をしなかった。そこで母は無理をして食事を取ったりした。しかし、ついに天寿を全うして亡くなった。霞客は日夜子どものように泣き続けたが、母を祭る文章を、董其昌や陳仁錫に依頼した。よろよろと這うようにして歩き、悲しみを抱いて依頼に行ったのであった。母の病が重篤なときは、我が身に代えてくださいと天に頼み、

また天下にひろく名葉を求めた。その篤い孝行ぶりは、枚挙に暇がないほどである。我が身を責めること、ほとんど自らの生命を削るほどであった。

注

長寿を言祝ぐ序文：陳繼儒撰「壽江陰徐太君王孺人八十敘」（晴山堂石刻）。張荅石・秋圃晨機圖：不詳。李維禎：一五四七〜一六二六年。字本寧。糊広承天府（湖北省）京山人。隆慶二年（一五六八）の進士。「明史」卷二八八本伝。序：李維禎「秋圃晨機圖引」（晴山堂石刻）。董其昌：一五五五〜一六三六年。字玄宰、号思伯。松江（上海）の人。万曆十七年（一五八九）の進士。画家・書家として、明代後半の第一人者。「明史」卷二八八本伝。「晴山堂石刻」に、「明故徐豫庵隱君暨配王孺人合葬墓誌銘」。陳仁錫：原文「陳司成」。明末の医学家にこの名のものがあるが、馮菊年「徐霞客遊記人名地名索引」が陳仁錫とするのに従う。「王孺人墓誌銘」がある。

八 霞客の旅遊の特色

喪が明けると、嘆息して言った、「昔の人は、母親が存命の間は、我が身を他人に捧げることができない、とした。いまや私は、我が身を山水に捧げてはいけないだろうか。いや最早それは許されるはずだ」と。かくして父母の墓に再拜して辞去し、距離も時間も限りを設けず、旅先での宿泊、野宿すら行って、自由に旅遊をした。

彼の旅遊には、他の人とは異なる場所があった。数尺の長さの鉄の棒を持って道を作り、どんな険しいところも切り開いて行った。霜露をもとせず野宿し、数日の飢餓も耐え、食べられる時には何時でも何でも食べ、野猿や野の精霊とも夜をともし、旅装で一枚の袴を持ってだけで、寒暑に耐えることができた。中でも最も「奇」なることは、天から与えられた健脚ぶりであり、輿や馬に乗る

ことはしなかった。あるときは竹林が繁茂する険しい崖で、百里あまりの距離があつたが、(一日歩いて)夜の崖の下の枯れ木のところへ着くと、たいまつを掲げて、細かい事柄もいちいち記録するのであつた。誰か人に出会い、ともに某州の某地の奇勝を語り合うや、すぐにそこへ出かけて行つた。そして数ヶ月立つと帰ってきて、語り合つた人を訪ね、その人が見ていなかった事柄について一一数えたと報告するのであつた。

注

「昔の人」の句：「史記」刺客列伝に「聶政、曰、「老母在、政身未敢以許人也」。
「旅装で」の句：原文「單夾」。よく分らない。夾に裕の意味があるので、かく解してみた。健脚：原文「躡」。獸の足のつま先だったもの、足跡。呂家伝の注は健脚と解す。「細かい事柄」の句：原文「拾穗」。落ち穂拾ひのこと。細かく丁寧にする、ことの比喩と解した。

九 「信心独往」な霞客の旅遊

あるとき席上で、「君は以前、一度雁宕山の山頂に行つたことがありますよね」と霞客に聞いたところ、彼は何か心に思うところがある様子だつた。翌日、まだ空が明けないうちに、彼は旅支度をして、私を訪ねてきて、「これから雁宕山を再訪します。帰つたら、きつとあなたに報告しますよ」と言うのであつた。十日程過ぎて霞客は帰つてきてこう言つた、「間道を取り、蔓を伝いながら登つてきました。龍湫の滝から三十里登ると、洞窟がありました。雁が宿るところです。さらに石ごろごろの道を登ること十数里で、正徳年間に白雲・雲外という僧侶が結んでいた草の庵に出ました。それはまだ健在でした。さらに二十里ばかりで、山頂に到達しました。強風が吹き荒れてい

ました。夜中には宿の廻りを数百等の鹿が取り巻いていました。三泊して下山しました」と。思い立ったらすぐに行動すること、このようであつた。

仲昭が笑いながら言つた、「そんなわずかな距離くらい、霞客にとつてはなんでもない。北京へ行つたときのことを述べれば、陳仁錫と、崆峒山の広成子の住まいの事を話している内に、そこからは北辺の塞外の地を見渡すことができることに話題が及びました。すると霞客は三日間の食料だけを用意して出かけていってしまったのです。そして戻つてくると、仁錫に彼がまだ見ていないことを伝えるのでした。滿族が北京近郊を侵したのはその数日後のことでした。

その翌年、福建へ行き、服喪中の黄道周を彼の故郷に訪ねようと思つた。さらにあるひとから預かつた手紙を持つて広東へ至り、羅浮山に登つて手紙を渡し、山中の梅の木を携えて帰つてきたのでした。

さらにその翌年には、黄道周を追つて、雲陽への途上に及びました。そして私が西陵にいることを思い出し、曹娥江を経由して四明山に登り、その五日後に、赤い蘭の花を手土産にして私を訪ね、山中の石の窓のような奇勝について語るのです。

我が弟が、心の赴くままに一人で出かけ、何も妨げるものがないこと、そして軽々しい約束や承諾をせず、有言実行であること、このようであります」と。

注

あるとき：前出の、崇禎五年、霞客が小寒山に陳函輝を訪ねたときのことである。草の庵：原文「團瓢」。円形の草堂。「遊雁宕山日記 後」五月四日条見える。遊記には鹿の話は見えない。北京へ行つたとき：遊記・墓誌銘に明

文がないが、丁年譜によれば、崇禎二年（一六二九）到北京と盤山に行っている。滿族が北京近郊を侵した：崇禎二年十一月。福建へ行き：二度目の福建旅遊は、崇禎三年（一六三〇）七月～八月。「閩遊日記 後」があるが、黃道周のことは遊記になし。あるひとから預かった手紙：黃道周の「七言古詩一首贈徐霞客」詩につけられた鄭鄭の跋に、霞客が手紙を持って羅浮にいる鄭を訪ねたとある。さらにその翌年：黃道周の「七言古詩一首贈徐霞客」詩の自跋に「徐霞客攜小舟、追予至丹陽。：崇禎三年二月」とある。そこから、丁年譜は、これは「次年」のことではなく、前掲の崇禎三年折のこととする。それが正しく、墓誌銘の記録に誤りがあるようである。

十 西南への大旅遊

(一) 旅行の目的—黄河長江、三天山脈を究める

霞客は神秘主義的な考えを好まなかった。天下をあまねく遊歴して、星々の通り道や地気の廻り方において、それらの淵源と交わる様について通曉していた。そしてこう言った、「昔の人達が、天文や地理について記述しているものは、往々にして前書の引き写しやこじつけである。長江黄河の二大河川と三本の大山脈は、文献の記載以来、中国という一部についてのものしか書かれておらず、その広大な全体像は明らかにされていない」と。かくして崑崙山の外、中国海外への旅遊をなさんとした。そして後漢の隱者である向子平の言葉を継いで、こう言った、「たとえば私が死んだとしても、（家長としての義務は果たしているので）我が家にとつて迷惑をかけることは無い」と。

注

向子平：後漢の隱者。仕官せず、建武年間に子女を全て結婚させて独立させた後、五岳名山に遊んでその終わるところを知らなかったという。

(二) 旅立ちと静聞の遭難

崇禎九年（一六三六）九月、江蘇の外にいた私に通の手紙を寄こし、離別を告げてきた。そこにはただ「西南地方を旅しようと思えます。故郷にはいつ帰ってこられるかは分かりません。もし見知らぬ国からの手紙が届いたら、それは私が遠い異境の地で書いたものです」と書いてあった。

そして仲昭が福建から帰るのを待つて、手を取つて一別し、大いに笑いながら出発したのであった。同行者は、僧侶一人と従僕一人。僧侶は静聞といい、破寺で修行中の身であった。そして徐霞客が旅遊に出ると聞いて喜んで同行を申し出たものであったが、長旅がどれほどのものになるのかをよく分かっていなかった者であった。出発して、浙江・江西・湖南あたりは、かつて訪れたことがあるところであった。ところが湖南の湘江で強盜に襲われ、荷物を全部盗まれてしまった。静聞は凶刃に斃れ、霞客はやっと命だけを免れた。皆は霞客に「ようやく助かった命であり、旅遊をやめた方が良い」と言った。しかし霞客はこう答えた、「私は鋏を一本担いで来ている。どこで死んでも構いはしない」と。かくして同郷の知人から旅費を借りた。そして静聞の遺骸を背負つて、洞庭湖に浮かび、南岳衡山に登り、七十二峯・十洞・十五巖・三十八泉・二十五溪の名勝を窮めたのであった。

注

従僕一人：遊記によれば、実際には王二と顧行という二人の従僕を連れて出発した。しかしその二週間後、浙江の洞山あたりで、王二は逃亡してしまい、その後ほとんどの時間を顧行一人を伴とした。その顧行も、遊記が終わる数日前に、雲南で逃亡している。静聞：徐霞客の西南遊に同行したが、途上で斃

れた。徐霞客に「哭静聞禅侶 詩六首がある。後述。破寺：閃中儼「静聞事略」に「迎福寺僧蓮舟法嗣也」とある。「私は鉄を」の句：原文「吾荷一鉢來」。どこで葬られてもいよいよ、鋤を担いできているということ。実際に鋤を担いでいる分けではなく、どこで死んでも構わないという意味。「静聞の遺骸を」の句：この記述、遊記本文とは異なる。「楚遊日記」では、静聞と別れて単独で南岳衡山に登り（崇禎十年一月）、その後合流して船で南下。その途中で強盗に遇っている（同年二月十一日）。その後も静聞とともに旅を続け、広西の南寧に彼を残し（同年八月末頃）、自らは中越国境まで行き、引き返したところ（同年十二月）、九月二十四日に静聞が死去していたことを聞かされている。七十二峯：これ以下、南岳衡山の名勝。

(三) 四川・貴州・雲南の遊

「以前の四川への旅遊は、十分ではなかった」と考えた。そこで四川に入って峨眉山に登り、北に進んで岷山まで至って、四川の西北部を極め尽くした。

また南に下って、大渡河を渡り、黎州・雅州あたりの瓦屋山や晒經山などの諸山に至った。さらにまた金沙江を調査し、塞外の地に野牛を探し求めた。金沙江から南へ瀾滄江に浮かび、また北へ行って盤江を探尋した。おおむね多くは西南夷の領域にあった。そして貴州・雲南の名勝もほとんど極め尽くした。

麗江土知府の木阿宅阿寺は、徐霞客が至ると聞いて、自ら門を出て出迎えたが、その礼は極めて恭しかった。彼の道行きに先回りして、羅川あたりの蕃族たちは、箒をはいて道を清め、蒙化の土知府も武器を背負って先導した。そのもてなしぶりは、列子が飲物屋から飲物を優先的に贈られたのにも劣らないものであった。しかし、霞客はそうしたもてなしを受け入れることなく立ち去り、食事の世話な

どにはならなかった。当時の雲南黔国公であった沐天波も霞客を客礼で待遇した。霞客が不思議な形をした木や蟠った根っこを持っていくと聞くと、それを見たいといい、更には二十両あまりの金で買取りたいと申し出た。霞客は笑って、「ほかでもない、趙の璧玉でもあるまいし、私自身が気に入っているだけなのです。どうして十五の城市もの価値があるでしょうか」と言った。黔国公は、益々霞客を高く評価した。

点蒼山・鶏足山に憩い、僧侶を礼拝して、静聞の遺骨を迦葉道場に埋葬した。閃中儼太史が、静聞の墓塔の銘文を作った。

注

以前：これ以下の蜀遊は日記に見えない。あるいは、欠落部分の「崇禎十一年五月十日から八月六日」条がそれにあたるのか。木阿宅阿寺：木氏は、代々雲南麗江の土知府を世襲。霞客と会った木氏は、本名阿宅阿寺、字長卿、号生白、著述もある知識人だった。「滇遊日記」六（一月二十九日条）に「木公出二門、迎入其内室、交揖而致懇勸焉」とあり、同七（二月二十五日～二月十一日条）に、麗江で木公にもてなされた記事がある。列子：「列子」黄帝篇。黔国公：黔国公と名のる沐氏は、明初に雲南平定に功を立て、代々「鎮」として、雲南の實質的な支配者であった。霞客と会ったのは沐天波。徐霞客「隨筆二則」は、雲南をめぐるの沐氏らの反乱などを記したのだが、そこで霞客は「会今上崇禎帝」登極（二六二八）、：即今嗣公沐天波、時僅歲一周支也」と書いている。「隨筆二則」が書かれたのは、雲南滞在中の崇禎十二年頃だとすると、時に天波は十二歳くらいとなる。趙の璧玉：「史記」廉頗藺相如列伝の「完璧」の話。大国の秦は、趙が和氏の璧を手に入れたと聞き、「城十五と交換しよう」と偽りの申し出をしてきた。藺相如は使者として秦に赴き、難しい交渉をこなして璧を全うして帰国した。墓塔の銘文：「滇遊日記」十一（七月十九日条あたり）に見え、銘文は徐霞客の「哭静聞禅侶」詩載の「静聞事略」であろう。

(四) 塞外への遊

鶏足山から西へ向かい、石門関を出ること数千里で、崑崙山に至り、星宿海を眺めた。山の半ばに登ると、風が強く吹いていて、衣が脱げそうなほどであった。そこから遠くの黄金の宝塔を望見すると、さらに数千里の遙か彼方であった。そこで遂に発願してチベットを旅し、大宝法王にお目にかかった。鳴沙山より外側は、どこも灼熱の砂漠で、須弥山や無熱惱池といった名勝などは、距離があつて、行きつくことはできなかった。

西域志によれば、砂漠が遙か彼方まで広がっており、人馬の骨が積み重なっているのを道しるべとする。化け物や熱風を避けることはできない、と。ここぞ、玄奘三蔵法師が諸々の魔物達を折伏させたところで、そのことは玄奘の記録に詳しく記されている。

霞客が、飛ぶ鳥が空を駆けるようにしてここに至ったことには、大いなる因縁があるのではないか。霞客が西遊した時は、既に現世を虚無なものとして見ていた。それが仏土に至ったからには、仏門に帰依する心が生じたであろう。

ところがたまたまある書物を読んでいて、楊黼先生のことを知った。楊黼は五華山に隠居していて、性理の学に専心していた。それがある日、法王に帰依しようとして、一心に修行に打ち込んでいた。ある人に出会った。その人は「法王はすでに南に行かれました。その衣はこれこれの色の女物で、男性用の履き物を履いています」と言い、言い終わると姿が見えなくなつた。そこで楊黼はあまねく探し求めたが、遂に見つけ出すことができなかった。しかたなく家に帰ることにした。帰宅すると、彼の母親が門を叩く音を聞きつけて、父親の履き物をつっかけて出迎えた。その衣服の色は、先に聞いた

色と同じであつた。かくして(儒教の、親に孝行するという教えこそ、仏教の教えに他ならないと)覚つた楊黼は、母親に叩頭して仏礼を行った。そして孔孟の教えで村人を教化したのであつた。

この話を読んで、霞客は嘆息して言った、「儒仏道の三教は、結局のところ儒教の五倫の教えを離れないものなのだ。私の親の墓は江陰にある。今や故郷に帰ろう」と。

注

鶏足山から…これ以後の域外の旅遊は、現実のことなのか疑わしい。日記には西域やチベットに行った記録は全く見えない。また雲南に入ってから日記はほぼ途切れておらず、チベット旅遊の部分が脱落したとも考えられない。記述されている内容も仏教用語を多用した伝説的なもので、写実を旨とする遊記とは大きく異なる。大宝法王…元朝の八思巴ハスバの尊号。以後ラマ教(チベット仏教)の教主をこう称す。西域志…具体的に何を指すのか不詳。玄奘の記録…原文「本傳」。「大唐西域記」のことか。楊黼先生…雲南太和の人で、五経に通じていた。年八十に至り、卒然として入滅した。「明史」卷二二〇本伝があるが、この話は載せない。

十一 黄河長江と三天山脈の概要

霞客は、峨眉山の手前から手紙を一通、私に寄こした。はるか異域からの出されたものである。また錢謙益にも一通送つていて、一緒に私に託された。それらの書簡の中では、歴涉した山川の形勝や岩石の様子などを書き記していた。またあわせて、黄河と長江について論じていた。「長江は岷山から始まるのではなく、黄河も天まで遡るわけではない。源は、黄河は崑崙山の北で、長江は崑崙山の南である。中国で黄河に支流が注いでいる省は五つ(陝西・山西・河南・山東・南直隸)、長江に支流が注いでいる省は十一ある(陝西・四川・

河南・湖広・南直隸、雲南・貴州・江西・広東・福建・浙江)。長江に注ぐ水量は、黄河の倍である」と。また三大龍脈(山脈)を論じている。「北龍は黄河を北からはさみ、南龍は長江を南からはさむ。中龍は河江の真ん中で区切っているが、やや短い。北龍からは南向きの支脈が中国に入ってきているのだが、南龍は氣勢盛んに中国の半ばを占める。いずれの脈も崑崙山から発しているのだが、(南龍は)金沙江と並びながら南下し、滇池を環つて五嶺に達している。龍が長いと言うことは、源から遠いということであり、脈の長さも長いということだ。長江が黄河より大きいというのはこのことから分かるだろう」と。かくしてこのことを「遡江起源」一篇にまとめた。私の友人の李瑞木(字は令哲、江陰県の県令)と私とで、霞客の「遡江起源」を「江陰県志」「靖江県志」の二つの方志に刻入し、桑欽「水経」・酈道元「水経注」の誤謬を正そうと思う。

注

錢謙益：一五八二〜一六六四年。江蘇常熟の人。字受之、号牧齋。万曆三十八年(一六一〇)の進士。徐霞客らとも深く交わっており、その生涯を「徐霞客伝」としてまとめている(明末崇禎十六年出版の「初学集」所収)。ところが、黄道周らが、明朝に殉じたのと異なり、南明政権がおれると清朝に降伏し、仕官した。「清史稿」卷四八九本伝。溯江紀源一篇：多く「徐霞客遊記」に附載されている。李瑞木：「崇禎江陰県志」によれば崇禎十三年に県令となつてゐる。江陰県志：崇禎江陰県志にあつた可能性が高い。道光刊本・光緒刊本「江陰県志」に収録されている。靖江県志：康熙刊本と光緒刊本を調べたが、いずれも収録されていなかった。桑欽：漢代の人で「水経」を著述したと言われる。酈道元：？〜五二七年。涿の人。字は善長。その著述は伝わらないが、「水経」に施した「水経注」四十巻は、中世の地理書として貴重である。「魏書」卷八九本伝。

十二 郷里への帰還と晩年

霞客は塞外の旅遊を終え、滇南に戻ってきたが、その地で足に病を発し、遊行できなくなつた。そこで留まつて「鷄足山志」を撰述した。「志」は三ヶ月でできあがつた。麗江太守の沐黔国公は、彼のために輿轎をあつらえて、送らせた。百五十日の間、輿轎にゆられてきたが、湖南省に至つて病が重くなつた。すると黄岡侯大令が船を用意してくれ、六日間で長江の下流に達し、ついに生還することができた。これは崇禎十三年(一六四〇)の夏のことである。霞客は家に帰ると、客人を迎えるでもなく、奇石をベッドの前に置いてそれを撫でたり眺めたりして、家産のことは気になかなかつた。

ただ、長男の徐妃にはこう語つた、「私は靈境を遍く遍歴したが、やや心に思うことがあり、『生は仮の宿りであり、死は帰ることである』ことが理解できた。自然のままに遊び、心にわだかまりをもたないのがよいのだ。ただ、旧友にもう一度会えないかというのが心残りだ」と。そして徐妃を派遣して、とらわれの身である黄道周を見舞わせた。徐妃が帰つてきて黄道周の現状を報告すると、霞客は腰掛けに寄りかかり、ため息をついて言つた、「人の寿命は定めがある。この欠陥だらけの世界では、荊の道や曲がりくねつた難路を進む(官吏としてまつとうな生き方をすること) 価値があらうか」と。重篤に陥る数日前にも、徐妃を寄こして私を馬渚に訪ねさせ、「寒山よ、火のしまつに気をつけなさい」と書いて寄こした。その情を交わすこと篤く、また落ち着いて静かで、決して乱れないこと、このようであつた。

注

鷄足山志：多くの「徐霞客遊記」に附載されているのは、「鷄山志目」という目

次と、「鶏山志略」という簡略版。「三ヶ月で」の句：康熙刊「鶏足山志」卷六人物流寓に徐弘祖の伝があり、そこには、霞客が四巻までは書いたが、病氣になったのでそこまですらなかった、とある。ここから丁年譜は、霞客が完成させたという墓誌銘の記事は誤りだとする。黄岡侯大令：不詳。荆の道：原文「迷陽」。諸説があるが、王先謙の説により「荆の道」とした。「莊子」人間世に、「楚狂接輿遊其門曰、『迷陽迷陽、無傷吾行』」とある。「火のしまつ」の句：原文「無忘灶下」。灶はかまど。一応、このように解した。

十三 墓誌銘依頼の経緯と、霞客の奇人ぶり

先生が逝去された三日後、仲昭が私に手紙を寄こした。それには「霞客がついにあの世に旅立ちました。臨終の時、墓誌銘を小寒山に托し、あなたがそれを不朽のものにすることを願っています、と言いました」と書いてあった。

私思うに、霞客はその旅遊によって重んぜられることはなかったが、千古の遊人とも言うべき人である。これ以後の遊人たちは、かならず霞客を重んずることになるだろう。

彼の天真爛漫さといえば、東方朔が靈芝の生えた草地で神馬の手綱を引きながら、家に帰るとお母さんの衣にすがったのと同じよう。

彼の親孝行ぶりといえば、曾参の母親が指を噛んだとき、遠方にいた曾参がそれを感じ取ったものと同じよう。

彼のどこへでも一人で出かける様といえば、孔巢父が頭をふつてこの地に留まろうとしないのと同じよう。

彼の奇を好む耽溺ぶりといえば、李白が元丹丘を訪ねたり、夢で天姥山に登ったことや、杜甫が木皮嶺の諸山の景勝地を經由して住まいを定めたのと同じよう。

彼の高義を追求し、約束を必ず守ることといえば、卓契順が惠州

にいる蘇軾への書簡を帯同したり、郭仲仁が担安の遺骨を背負ったのと同じよう。

そしてその狷介な性格の赴くところは、往々にして古来の賢人や友人達とは相容れないところがあった。

仲昭はまた、こうも言っていた、「彼の旅遊にはさらにふたつの『奇』があった」と。

霞客は性として「奇書」を好んだ。自分が未見の書物を客人が持っている、すぐさま財布を空っぽにしても買い取ってしまう。足りなければ衣服を売ってまでして代金を用意して手に入れ、自宅へ持ち帰った。そうした「奇書」が箱や棚にいっぱい、宮廷の書庫に比すほどであった。

また性として「奇人」を好んだ。身分の高い役人は必ず避けて交わろうとせず、多くの人が集まる都市は駆け足で走り抜けた。気持ちのあうものがいれば、すぐさま訪問して、名刺を投じ、堂にあがりこんで語りあい、意気投合した。

送別の言葉は受け取るが、贈りものをされるとそれは拒み、もう二度とその人を訪ねることはしなかった。

注

逝去：原文「仙遊」。あの世に旅立ち：原文「作岱遊」。「靈芝の生えた草地」の句：「漢武洞冥記」。「曾参」の句：「二十四孝」。孔巢父：杜甫の「送孔巢父謝病扁遊江東兼呈李白」の詩に「巢父掉頭不肯住、東將入海隨煙霧」とある。「李白が」の句：原文「李謫仙訪元丹夢遊天姥」。李謫仙は李白。元丹丘は唐の道士。李白は彼との交わりをたくさん詩に歌っている。李白「夢遊天姥吟留別」は、天姥山への想像上の旅遊を歌った幻想的な詩。「杜甫が」の句：原文「杜拾遺經木皮嶺諸山佳者居要」。杜甫「木皮嶺」詩は、木皮嶺に登る旅の詩。卓契順：北宋時代、蘇州定慧寺の卓契順が、遙か惠州にいる蘇軾へ手紙を届けた

こと(「東坡志林」卷二)。郭仲仁…不詳。「その狷介な性格」の句…原文「其介性所鍾、又往往在昔賢矜契之外」。一応こゝ訳したが、ご教授を待つ。

十四 友人らが評する霞客の徳性と言動

故郷の友人達が霞客について語ったことによれば、彼は旅遊だけが立派だったわけではない。生涯親に仕えて孝行だったことは、彼らが記した志伝や凶贄に見えている。兄にも父に仕えるように仕え、老年に至っても仲睦まじかった。弟たちも、均等に遺産を受け、遺言で差をつけることはなかった。

また先祖を追尊すること手厚かった。仲昭と協力して、先祖の遺文を記録して、出版したりした。また先祖の肖像画をきれいにし、装丁し、時々には礼拝した。先代の墓石が雨ざらしになっていると、瓦葺きの建物でそれを被った。一族を引き連れて先祖のお祭りをし、ては、「母の教えですから」と言うのであった。親族への対応は、「義」にあうことは率先して行い、孤児を援助した。不作の歳は、いつも食糧を抛出して飢えた人々を救い、私財をなげうって橋を修理したり、古い建築物を復興したりした。

たまたま君山に行ったとき、張宗璉の祠が瓦礫の中に埋もれているのを見つけた。そこでそこを掘らせたところ、楊士奇が碑文を書いた石碑を得た。すぐさま資材を集めて祠を再建し、石碑を作り直した。郡のひとびとは、義拳であるとして彼を褒め称えた。

〔「江陰志」にいう、「張君廟は、君山の西の麓にある。宣徳七年(二四三三)の創建。本府の同治であつた張宗璉を祭つたものである。彼の功績人徳は、楊士奇の『廟碑記』に詳しい。この廟はのちに廃れた。弘治十一年(一四九八)に知県である黄傳が、天妃宮を改築

して張公廟となし、季節ごとにお祭りをした。しかしこれもしばらくして廃れた。天啓四年(一六二四)に至り、この地の人である徐宏祖が、私財を出して再建した。董其昌に依頼して、周忱が揮毫していた楊士奇の碑文を、改めて書かせた。大学士である周延儒が以上を記す。〕

琴瑟の弦を取り替えれば音は同じなように、何度か再婚したが、子どもたちは衣服もきちんと整えられて、分け隔てをされることはなかった。三人の子どもは成人したが、異腹であつても、異なつた育てられ方をされることはなかった。同じ地所に住まい、家計の費用なども応分に負担するといふ奇特な子ども達であつた。これも霞客が均しく十分に支援をし、細かいことにこだわる必要がないようにさせたからであつた。

注

君山：江陰郊外の小山。戦国四君子のひとり、春申君を葬った地からの命名という。張宗璉：一三七四年～一四二七年。字重器、江西吉水の人。永樂二年(一四〇四)の進士。宣徳二年(一四二七)常州同治に左遷されが、この地で善政を敷いた。「明史」卷二八一本伝。江陰志：崇禎「江陰県志」の当該記事と一致する。民譜には、この志の引用はない。楊士奇：元至正二十五年(一三六五)～明正統九年(一四四四)。江西太和の人。名寓、字士奇、諡文貞。「明史」卷一四八本伝。黄傳：崇禎「江陰県志」卷四名宦に伝がある。周忱：一三八一～一四五三年。字恂如、号双崖、諡文襄。張宗璉と同郷。南直隸巡撫として民政の改革を行った。「明史」一五三本伝。周延儒：没は、崇禎十六年(二六四三)。宜興の人。字玉繩。万曆四十一年(一五六二)の進士。「明史」卷三〇八本伝。徐霞客とも親しかったよう、霞客の父の有勉に関する文章を残している(前掲)。

十五 霞客の著述

霞客は詩や古文に秀でていたが、とりわけ遊記に長けていた。文震孟・黄道周両先生などは、その遊記をとっても興味をもって賛美していたが、霞客自身は書架にしまっていて、人に見せたがらなかった。今その書をひもといてみると、世界内外のあらゆる事が書かれており、さながら、司馬相如の著した「封禪書」のようである。仲昭が校訂をしているが、遊記をきちんと校訂するのは、私の生涯のもう一つの仕事である。

注

文震孟：一五七四～一六三六年。長州の人。字文起、号湛持。天啓二年（一六二二）殿試第一位。「明史」卷二五二本伝。霞客とは親しかったようで、取り交わした詩がたくさん残る（「徐霞客遊記」や「晴山堂石刻」。「封禪書」：前漢の司馬相如が臨終になって、武帝に封禪を勧めた書物。

十六 墓志の結び

霞客は万曆十四（二五八六）年に生まれ、崇禎十四（一六四二）に没した。卒年は五十六歳であった。同十五年（一六四二）春三月九日、馬湾の新墓に埋葬した。

小寒山陳某が銘を作った。

十七 銘

銘にいう、

龍とともに遊んだり、鴻とともに飛翔したり。

太陽を追いかけたり、風に乗って空を飛んだり。

世界の外を極め尽くして、国内をくまなく踏破し、いまは仙人の宮

殿（墓地）に休息されている。

馬湾には、りっぱなたてがみのような、（霞客先生の）高徳の心が聳え立っている。

いまや先生は天上に遊ばれており、ひとびとはそこをすばらしい都市だという。

ああ、その学識人徳は、人並みはずれてすばらしいものであった。

注

「馬湾には」の句：原文「馬湾有鬣、徳心是崇」。霞客の故居がある馬湾（馬鎮）という文字遣いにかこつけて、馬のたてがみのように、霞客の徳と心が気高いことをいうか。「その学徳」の句：原文「非吳下阿蒙」。三国時代呉の呂蒙は、若い頃は武略に優れていたがあまり学問ができなかった。のち孫権の勧めで学問に励み、学識が豊かになった。久方ぶりに呂蒙に会った魯肅はおどろいて、「君はもう、昔の呉のまちにいた『阿蒙（蒙ちゃん）』とは違う人のようだ」といった。（「三国志」呂蒙伝）。のちに、学徳が特段に優れたり、進歩したりした人を言う。呂蒙伝では、「変化が甚だしいこと」の比喩と見、死んでしまったことをいうと解している。

参考文献

褚紹唐・呉王寿整理「徐霞客遊記」上海古籍出版社、一九八〇年（「上海本」）

丁文江「徐霞客先生年譜」（「徐霞客遊記」附載）上海商務印書館、一九二八年（「丁年譜」）

呂錫生主編「徐霞客家伝」吉林文史出版社、一九八八年（「呂家伝」）
荒公廉訓点「虞初新志」河内屋徳兵衛、一八五一年

（了）